

「希望学」 ルカによる福音書 24:13～35

【導入部】

みなさん、おはようございます。3月から、この教会でユースパスター、青年担当牧師として、またキリスト者学生会（KGK）の主事として、奉仕を始めておよそ2ヶ月が経ちました。皆さまが暖かく迎えてくださったおかげで、本当に楽しい教会生活を送ることができています。今月からは、いよいよ毎月一回説教奉仕をさせていただけるということで、大変楽しみに思っております。

それでは、祈りをもって、このメッセージを始めて参りたいと思います。お祈りしましょう。

祈り

愛する天のお父様。あなたの尊い御名をあげ、心より賛美いたします。

本日、このように、この場所で、ここにいらっしゃるお一人ひとりとともに、礼拝を捧げられていることを、心より感謝します。

私たちはあなたが必要です。あなたの助けなしで、一分一秒たりとも生きていくことはできません。だからこそ、このように礼拝を捧げられることを、あなたと深い交わりをもつことができることを、心より感謝致します。目には見えませんが、あなたがここにおられることを信じ、あなたに期待をします。

ただいま、聖書が開かれました。あなたが、聖霊さまにあつて、導いて、書かせてくださった、このいのちのことばを、神のことばを、あなたの思いを、私たちが本当に悟ることができるよう。どうか、私たちの心を照らしてください。

弱き者が、取るに足らない者が、あなたに立てられたゆえに語ります。準備の中であなたが助けてくださったことを信じます。どうか今も、助けてください。憐れんでください。あなたの心を、あなたが教会に語りたいことを、忠実に語るすることができますようにしてください。

あなたに、ただあなたに期待し、また感謝をして、私たちの主イエス・キリストのお名前を通して、この祈りをお捧げいたします。アーメン。

説教題について

本日の説教のタイトルは「希望学」という、おそらく聞き慣れない方が多いであろう言葉を選ばせていただきました。

「きぼうがく」の「がく」は金額の「額」ではありません。「学ぶ」という字です。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、「希望学」というのは一つの学問分野の名前でして、そもそも希望とは何か、あるいはどのような状況で人は希望を感じるのかということの研究しているようで、特に2011年の東日本大震災以降、希望という単語がますます注目されている、あるいは流行していると指摘されています。なぜ、希望という単語が注目されているのか、流行っているのか。その答えは大変シンプルだそうで、それは希望がないから、現実に失望しているから、だから人々は希望という単語を使うのではないかと指摘されています。

悲しみが多い世界です。仮に、個人的には今は楽しくてハッピーだったとしても、将来のことを考えると、希望を持つことができない。闇が深いからこそ、希望ということばに注目するのではないかとされるのです。希望学という分野、なかなか面白そうですね。

イエスさまは、弟子たちに対して「あなたがたは世界の光です」と言われました。現在のようにわかりやすく暗い時代においては、わかりやすく希望を持ちにくい時代においては、クリスチャンに与えられている希望の光は、もっと分かりやすく輝くはずで、歴史的にも、教会が拡大

したのは、暗く苦しい時代でした。重く、苦しいこの世界だからこそ、真（まこと）の希望はさらに輝きを放つはずで。

しかし、問題があるんです。そのような時代に生きてると、つまり希望を持ちにくい時代に生きてると、クリスチャンもまた、希望を失いやすい。まず、希望というからには、それは将来のことなので、目に見えません。目の前で、分かりやすくクリスチャンがどんどん増えていたら、希望を持ちやすいかもしれない。でも、私たちの希望は必ずしもそのような形で現れるものではないからこそ、逆に持ち続けにくいという現実もあるわけです。

少々前置きが長くなりましたが、今日は、まさに希望を失っていた二人の弟子たちに、イエスさまが何をしてくださったかということをとともに受け取り、私たちに与えられた希望を、ご一緒に学んでいきたいと思うのです。

Ⅱ本論部

一. エマオに向かう弟子たちの姿

それでは早速聖書を見ていきたいと思いますが、先ほど読まれた箇所最初の 13 節に「**ちょうどこの日**」とあります。「この日」、それはイエスさまがよみがえられた日でした。私たちは 4 月の 1 日の礼拝で、イースターをお祝いしましたが、「この日」、イエスさまの弟子であった女性たちが、イエスさまのからだに香料を塗るために墓に行きました。しかし、墓の中にあるはずのイエスさまのからだが見当たらない。すると天使が、イエスさまは復活したのだと語る。彼女たちは、急いで弟子たちのところに戻って、喜びながら報告をする。でも弟子たちは信じない。ペテロや、あるいはさきほど読まれた 24 節にもありましたが、「**仲間の者の何人か**」は墓に行って、確かめに行ったものの、亜麻布しか残っていったことに驚いたということが書かれてあります。

これらのことが起こったまさに同じ日に、この箇所に出てくるクレオパともう一人の弟子は、これらのことを起こったエルサレムを離れ、エマオという村へ行こうとしていました。これらのことを論じ合いながら、まさにこれらのことが起こったエルサレムから離れて行こうとしていた。なぜ、彼らは、エルサレムを離れ、エマオに向かっていたのでしょうか。

17 節を見ると、「**二人は暗い顔をして立ち止まった**」とあります。19-21 節ではこのように言っています。「**ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。**」

かつては希望を持っていた。イエス様に期待をしていた。「この方は、行いにも言葉にも力がある。この方は、ローマ帝国の支配という苦しみから解放し、神の国をこの世界にもたらしてくださる方だ」。そのように期待し、そのような希望を持っていた。

しかし、ご存じのように、実際に彼らが目にしたのは、見るも無残な十字架でした。敗北でした。彼らは、自分たちが信じてきたものに、失望していた。

22 節からには、彼らが、女たち、そして墓を見に行った仲間たちの証言を聞いたことが書かれてあり、彼らがイエスさまが復活したらしきことは聞いていたということが分かります。それならば、エルサレムに残って、墓を確認しに行ったらいいじゃないかと思うかもしれない。

でも、彼らはそうはしなかった。もちろん気にはなるんです。だからそれについて話し合っただけではいた。でも、失望の方が、あるいは、疑いの方が大きかった。だからこそ彼らは、復活が起こったはずのエルサレムから、そしてそれを目撃したと言っている弟子たちの交わりから離れて、エマオに向かっていた。

人間の気持ちというのは移ろいやすいものです。私も、ちょうど先々週の水曜日、KGK の主事

たちの歓迎会と祈り会があって、夕方、青葉台駅に降り立ったときにはめっちゃ疲れていたんですね。なんかやる気が出ない。そうすると信仰まで落ち込んでくる。おそらく満員電車が原因だったのではないかと考えているのですが、で、私は水曜の夜の祈禱会にいつも出席していて、先週の祈禱会にはユースのメンバーも来てくださって、本当に感謝しているのですが、その前の週ですね、祈禱会に行かなくてはいけないので行ったんですけど、すごく疲れているので、祈禱会が終わって帰ったらすぐ寝ようと思っていました。

でも、祈禱会に行くと、賛美をして、御言葉を聞いて、祈って、帰ってきたら、なんか妙に元気になっていてですね、元気なので、そっからいくつかの仕事をサクサク終わらせることのできたんですね。寝る前に思ったんです。人間の気持ちというのは、なんと移ろいやすいものか！

もちろん、そのときは良い意味で気持ちが変わったわけですが、こういうこともあると思います。ある時に、信じたと思った。でも少し経つとほんとなあ...と思ってしまう。あのときはあれだけ熱かった、でも時間が経つと冷めていく。特に、大きな挫折や、辛い出来事を経験したときには、そのような大きな気持ちの変化を経験することはあると思うのです。

この箇所に出てくる弟子たちのように、イエスさまを信じていた。イエスさまに希望を置いていた。でも、十字架のように、悲惨で、敗北に思えるような出来事を見て、失望して、イエスさまから、あるいは交わりから離れていきたくなくなるのが、私たちにもあると思うのです。

二. イエスさまの姿

このストーリーが語るグッドニュースがあります。このストーリーが語る福音、グッドニュース、それは、そんな二人に、希望を見失っている二人に、イエスさまご自身が近づいてきてくださったということです。

イエスさまは二人に近づき、語りかけられました。17節をご覧ください。「[歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか。](#)」

イエスさまという方は、聞いてくださる方です。私たちの正直な思いを聞いてくださる方です。「あなたが抱えている失望は何だ？何が辛いんだ？何が分からないんだ？何にモヤモヤしてるんだ？」

この方は、あなたを愛しているから、安心して、正直に語って良いんですね。私は、詩篇が大好きなんです。またいくつかここでもやりたいと思っていますが、そこには本当に赤裸々で、ここまで言っているのか！？という正直な祈りがたくさんおさめられています。

かくいう私も、よく偽ってしまうんですね。イエスさまに対してまで、良いことというか、正解を言おうとしてしまうんです。イエスさまには、正直に、葛藤を語って良いのです。私も、本当にそれをよく忘れてしまうのですが、思い出して、正直に祈るとき、いつも神さまの愛を体験させられています。

本論に戻りたいと思いますが、そのようにイエスさまに尋ねられた彼らは、イエスさまだとわからなかったからではありますけれど、先ほど見たように、偉そうにというか、また限りなくネガティブに答えます。

それに対して、イエス様は二人に語られます。25節ですけれども、「[ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち](#)」。新改訳では、「ああ、愚かな人たち」となっています。

これも、もちろん想像ですけれども、眉毛を釣り上げて怒っているとか、あるいは愛想をつかしているようなことばではないと思うんです。むしろ、暖かい愛のまなざしで「おいおい、あほか」「違うやろ」。ちょっと関西弁が出ちゃいましたけれども、優しく語られたのではないかとと思うのです。

イエスさまは、交わりから、エルサレムから、教会から、離れて行こうとする人々を、軽んじて、さばいて、「出て行け」と言う方ではありません。むしろ、その痛みを聞き、理解し、受け止め、エマオへの道を共に歩んでくださる方なのです。

イエスさまは、私のような、救いようもない罪人を受け入れてくださった方です。だからこそ、教会もそうするんですね。教会もまた、誰かが倒れそうになるときに、誰かが離れそうになるときに、その人を見下すのでもしかりつけるのではなく、イエスさまがされたように、寄り添い、祈り、共に歩むのです。

そして、これは先々週の礼拝で江上先生も触れてくださってことですが、イエスさまは、旧約聖書全体から、ご自身について、語られました。およそ 11 キロと言われる道の間のどの地点で、イエスさまが彼らに会ったのかは書いていません。どれくらいの時間だったのか、あるいは具体的にどんな話をされたのかは、私たちには分かりません。でも、本当に素晴らしいお話だったのだと思います。彼らはもっと聞きたいと思った。

彼らはエマオの村よりも先へ行きそうなイエスさまの様子を見て、イエスさまを無理に引き止めます。「一緒にお泊まりください」。もっと、あなたの話が聞きたいんです。イエスさまは彼らの求めに応じて、「共に泊まるため家に入られ」ました。

そこで、イエスさまは、パンを取り、パンを裂いて祝福されます。これは、当時の習慣では家の主人、あるいは食卓に招いた側がすることでした。でもイエスさまはあえてこのことをなされました。

この光景をどこかで見たことはないでしょうか。十字架にかかれる前の夜、イエスさまがご自分でパンを裂いて、ぶどう酒を分けられました。そして言われました。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」(マタイ 26:26,27)。イエスさまが、その大きな愛を示されたあの夜が、彼らの目の前で再現されたのです。

三. 目が開く

31-32 節をご一緒にお読みしたいと思います。「すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、『道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』と語り合った。」

まことに不思議なことですが、食事の席で、彼らの目が開け、イエスだと分かったと言うのです。なんでここまで分からなかったのかと思うかもしれませんが、私たちも気づいていない。見えていない。イエスさまはあなたが希望を失いそうになるときに、ともに歩んでくださっているのです。問いかけ、語り続けてくださっていることに気づかないことの方が多い。

彼らは、そのことに、この食卓で気づかされたのです。そしてさらに、気づいたのです。イエスさまと話し合っていたとき、聖書のメッセージを聞いていたとき、心が燃えていた。あとになって気づくという、不思議な燃え方です。

そして心燃やされた弟子たちがどうしたか。なんと、食事をほっぽり出して、すぐにエルサレムに戻ったのです。走っていったのではないかと想像します。私は行けなかったのですが、昨日のナザレンピックを思い出す方もいるでしょう。

夕食の時間なので、外は真っ暗だったでしょう。でも、いても立ってもいられなくなって、エルサレムに戻り、他の弟子たちに報告します。安全な場所を出て、危険な場所に向かっているのです。

III 結論部

私たちは変わりやすいんです。あるときは燃えていても、落ち込んで、あきらめて、交わりから離れそうになることがあるかもしれない。希望を失いそうになることがあるかもしれない。

でも、エルサレムを離れ、エマオに向かっていた二人の弟子たちに近づいてくださったように、イエスさまは私たちにも近づき、問いかけてくださるのです。「どうした？正直に言ってごらん」。そして、聖書が語られる場所で、イエスさまの十字架が、赦しが、永遠のいのちが語られる場所で、気づくのです。イエスさまが共に歩んでくださる。永遠に、死を越えて、共に歩んでくださる。何度でも、聖霊さまの力で、心を燃やしてくださる。何度でも何度でも、希望を教えてください。この方が、私たちの希望なのです。

だから私たちは、安心して、希望学をし続ける。希望をもっともっと知っていき、どんな場所にあっても、希望を語り続けるのです。午後の総会も、希望が語られ、心が燃やされる時となることを願い、また期待しています。希望を携えて、希望を学び、語り続ける歩みへと、遣わされていこうではありませんか。お祈りしましょう。